

男性名詞複数語尾 -ам, -ами, -ах について

千葉 萌 一 郎

これまでは、男性名詞の格語尾形態について其れ其れ考察を加えて来たが、最後に残された形態である複数与格、造格、位格語尾 -ам, -ами, -ах については、ここで一括して述べて置きたいと思う。何故なら其れ等一連の語尾の推移には、かなりの共通点が見出せるからである。

現在の -ам, -ами, -ах 形態は、原初は \bar{a} 語幹にのみ固有であった。次に \bar{a} 語幹を除く其れ其れの語幹の複数与格、造格、位格の形態を示せば以下のようなになる。

語幹	-Ō	/ -jŌ	-Ū	-ī	子音
複数与格	-омъ	-кмъ	-ъмъ	-ьмъ	-ьмъ
複数造格	-ы	-и	-ьми	-ьми	-ьми
複数位格	-ѣхъ	-ихъ	-ѣхъ	-ьхъ	-ьхъ

今複数与格語尾について述べると、短縮母音 ь, ѣ 消滅の推移に関連して 13 世紀には、其れ其れの語幹に共通な複数与格形態 -омъ, -емъ が生じていた。しかしながら複数造格、位格語尾については、事態は複雑であった。もしもここで其れ其れの語幹の相互作用開始の時期を先史期と推定すれば、これ等の語幹と \bar{a} 語幹との相互作用は文献により 13 世紀以降のことと認められる。しかしながらこの時期にあつては、語尾 -амъ, -ами, -ахъ 形態は未だ散見されるにすぎなかった。1305 年頃の古文書においては、新しい複数与格語尾を持った次の二語のみが、やっと認められるにすぎなかった、боярам, дворянам. 一体いかなる契機により \bar{a} 語幹複数与格、造格、位格語尾 -амъ, -ами, -ахъ が、他の変化形態のなかに滲透していったのであろうか。

今これ等の問題を考察する順序として、まづ最初に複数与格語尾拡大の原因をとり上げてみたい。それには次のような要因をあげることができよう。

1. 語尾 -а を持つ中性名詞複数主格形態の影響, бревна, окна. この語尾は複数与格・対格同形で、更に複数生格において零語尾をとることにより、複数与格語尾 -амъ の交替を促進したと考えられる, беззакониям (Паремейник 1271 г.), селам (Двинские грамоты 15 в.). この説は И. В. Ягич, А. А. Шахматов, Л. А. Булаховский 等により支持されている。

2. \bar{a} 語幹に男性名詞が存在していること, воевода, юноша, путята, слуга, судья. В. Unbegaun がこの点を、第一の要因としてあげていると、Л. А. Булаховский が述べている。

3. 単数主格において接尾辞 -ин, 複数主格において語尾 -е を持つ語彙群の影響, бояре, крестьяне, христиане. 語尾 -е は主として北方方言において、集合名詞形の影響により -а と交替した。この場合においても複数主格語尾 -а は、前記同様語尾 -амъ の滲透を促進した, египтянамъ (Паремейник 1271 г.), к латинамъ (Рязанская Кормчая 1284 г.), боярамъ, дворянамъ (Новгородская грамота 1371 г.). この種の語彙は数においては多くはなかったにしても、広く用いられていた。各地域に渡って散在する古文献中特に北方の文献が興味の対象となるゆえんは、その中に接尾辞 -ин を持つ語が相当多数見出されることである、

вятчанинъ, вязьмитинъ, галичанинъ, двиненинъ, калуженинъ, костромитинъ, немчинъ, псковитинъ, ржевитинъ, туленинъ 等。Л.А. Булаховскийによれば、 боярам タイプの形態と平行して意味上関連性のある次の語に、-амъ 形態が現れたのは偶然ではないとしている、 матигорьцамъ (Паремейник 1271 г.), купцамъ (Договорная грамота 1373 г.), княжоостровьячамъ (Двин. рядн. XIV в.), чернцамъ (Двин. купч. XIV в.)。

4. 後に複数主格形態と見做されるに到った集合名詞群の影響、братья, господа, латина, шурья. もしもこれ等の語彙に新語 зятевья, кумовья 等を加えるならば、複数主格 -а/-я を持つ語彙は更にその数を増ことになるであろう。なほ複数生格零語尾の場合に主格語尾の影響は、複数主格に -е を保持する際、複数与格にこの -е が現れることによっても認められよう、 бояре — бояремъ (бояромъ の代りに), списка не чести перед псы а прочести ево бояремъ (Судебник 1589 г.)。

5. аканье の影響。複数与格 -ам 形態の拡大を押し進めた今一つの原因は、南方より北上し比較的早い時期に中部地帯に (Москва) 拡大した аканье である。アクセントの落ちない語尾 -омъ (холопомъ) の о は а に近く発音された。

以上の諸点を基盤にして考えた場合に、複数与格、造格、位格語尾 -амъ, -ами, -ахъ の滲透は、複数与格語尾より開始されたと考えるのが至当のように思われる。初め複数与格語尾 -амъ の形態で最も早く統一が実現し、次いで複数造格、位格へと拡大が及んだのであろう。

しかしながら、これとは異なる有力な見解もある。それは、これ等の語尾の滲透は、複数造格より開始されたとする説である。何故なら複数造格は、その形態において、複数主格・対格と同形であるからとしている、 столы, города, плоды. 事実、語尾 -ами の複数造格形態への滲透を促進したのは、それが形態において複数主格・対格語尾と同形であったからに外ならない。

А.А. Шахматов はこの見解に立って次のように述べている。男性名詞複数主格・対格形態が、語尾において女性名詞の其れ其れと一致した時、複数造格 -ы に代る -ами の男性名詞における出現は不可避的であった。 вороны — воронами は、 морозы — морозы に代って морозы — морозами を、 душѣ — душами は рубли — рубли に代って рублѣ — рублями を招いた。このようにして語尾 -ы/-и に代る -ами が、男性名詞変化形のなかに滲透した。-ами を通じこの複数造格語尾 -ы/-и 駆逐の不可避的な結果は、女性名詞複数語尾 -амъ, -ами, -ахъ を通じての複数与格語尾 -омъ/-емъ, 双数与格語尾 -ома/-ема, 複数位格語尾 -ѣхъ/-ихъ の駆逐であった。更に、А.А. Шахматов は続ける。女性名詞複数語尾の男性ならびに中性名詞変化形への拡大は、造格から開始されたという論拠として、これを先験的に (à priori) まづ間違いないものと思われる前記の見解の外に、現在 -ами はすべてこのロシア語方言のなかで支配的であるのに反し、-ом, -ех はどこでも必らずしも駆逐されてしまった訳ではないという事実に注意する必要がある。例えば、白ロシア語においては語尾 -ом の拡大があり、ウクライナ語においては語尾 -ом と北部ウクライナ語のバリエント -ум 等がある、としている。

以上の А.А. Шахматов の説に対して Л.А. Булаховский は、古文献に依拠すると、モスクワ方言において複数造格が -ами 形態をとるようになったのは、複数与格、位格に、-ам, -ах が滲透した時よりも著しく遅かったとする В. Unbegaun の説を引用し、更に次のように述べている。複数造格は恐らく特殊な道程を辿ったのであり、その語尾 -ами は [中性名詞及び接尾辞 -ин を持つ男性名詞等] 語幹の性質に関わりなく拡大したものと思う、 съ клобуками

(Паремейник 1271 г.), хмелниками (Двинские грамоты XV в.). しかしながら支配的な複数造格の古い形態 -ы/-и は、モスクワの古文書においては少なくとも複数与格、位格の新旧形態の文語、口語の対比 -ам — -ом, -ах — -ѣх の場合のそれよりも、一層鋭い対比を示すことで、文語的であるという事実は否定さるべくもない、としている。

一般的に言って、すべてこれ等の形態 -ам, -ами, -ах による統一過程は、長期間に渡って徐々に進行したものであった。未だ 16 世紀から 17 世紀にかけても古い形態は、極めて強力にその存在を示していた。古い形態は古文献、特に Домострой に色濃く残されている。Н.А. Соколова の調査によると、複数与格形態に関しては、依然 -омъ/-емъ 形態が主流をなしていることが分る、грѣхомъ, по дѣломъ, мужикомъ, государемъ, мужемъ, сторожемъ. -амъ 形態は三個所のみ認められる、по добыткамъ, по залавкамъ, по хоромамъ. すべてこの場合には語尾にアクセントを持たず、その主張する強さを弱めているばかりではなく、хоромы の場合には女性名詞 хорома を起源とする可能性があると思われる。複数造格形態においても主流をなすのは語尾 -ы/-и であった、з домочадцы, со иноземцы, имяны прежреченными, с луки (оружие), с родители, с рыжики (грибы), со светильники, ложными словесы. 新形態 -ами は、次の場合に認められる、з рудьями, домами, зубами, с товарищами, уторами и ладами. 次の個所は両形態がすでに標準的で、対等に使用されていることを物語っている、пирогы з блинцы и з грибы и с рыжики и з рудьями. 位格においては古い形態が著るしく多いのに対し、新形態 -ахъ は 13 例見出される、としている。

Уложение 1649 г. においては、дворамъ, дворахъ 形態はごく稀であるのに比し、городомъ, города, городѣхъ, товарищехъ 形態が依然主流をなしている。なほ Л.А. Булаховский によると、-омъ 形態は 18 世紀初頭においても稀ではあるが現れていると報じている、Десятским и всем крестьяном накрепко приказать... (Инструкция дворецкому) ... при том же и крестьяном позволение дайте подчищать сучья... (同上)。更に А.Д. Кантемир (1708–1744) には、... везде примечает, что в домех, что в улице, в дворе и в приказе Говорят и делают がある。新形態の複数与格、造格、位格語尾が完全に主流をなすようになったのは、国語としてのロシア語が不動の位置を確立した時であった。しかしながら依然 М.В. Ломоносов (1711–1765) の文中には、古い複数造格形態が次のように見出される、Уже со многими народы Гласят эфир, земля и воды или Языки разными вещает твой народ. ところが С.П. Обнорский は Г.Р. Державин (1743–1818) の作品に、旧形態の使用例として一例を見出したにすぎない、И цельты с мидяны, с египтяны поправны. 18 世紀における稀な例として В.П. Петров (1736–1799) の作品に、Кто взглянет на такую картину не хуля, Где с парусы корабль написан без руля? (К вел. государыне) がある。Н.Р. Судовщиков はその作品中で、19 世紀初頭の官吏の言葉に特徴的な形態として、次の例をあげている、Читал я объявление...: Построил я театр с партеры, со кулисы: Потребны мне теперъ актеры и актрисы...

П.Я. Черных は古い形態として 19 世紀初頭の Московские ведомости に掲載された次の広告例 Продается (поместье)... с землею, лесы, санными покосы и мельницею (1801 г., № 7). 及び А.С. Пушкин の作品よりの諸例 Гюго с товарищи (Домик в Коломне), С дубовыми тесовыми вороты (сказка о рыбаке и рыбке), 更に北方ロシア民話のなかで今日に至るまで伝えられているとして次の諸例をあげている、за мхами, за болоты (Сарат. обл.), за тремя красны крылечки (Владимирск. обл.), со цёсныма свима родители

(Арханг. обл.), хвастат кони добрыма (Печора).

Л.П. Якубинский は、古い複数与格形態が現代ロシア語に保持されている例として、поделом をあげている。

長期に渡る古い形態の保持及び新形態との長期に渡る共存は、又男性名詞語尾の女性名詞変化への滲透の原因ともなった。このような事実は、特に位格において幅広く観察される。例えば Домострой における на погребницахъ, в торговлехъ, в поварнехъ, в хлебнехъ 等。又 Л.А. Булаховский には次のような引用例がある ...и ты бы те все денежные доходы прислал к нам в полки к Москве с старосты и с целовальники тотчас наскоро (Грамм. бояр из Владим. чети во Влад. к воеводе, 1611 г.), А подволоки у полаты выписано травами, красками розными; а украшены полаты различными красками... (Материалы, относящиеся к путешествию Ив. Петлина в 1618 г.), Да своими сабельки острыми (История об Азовском осадном сидении донских казаков. XVII в.), Со всякими угоды и съ рыбными ловли (Дело о патриархе Никоне).

А.А. Шахматов によると、こうした影響は初期の文献においても認められるが、しかしそう多い例とは思えないと述べている。

最後に 10 世紀から 11 世紀に至る間に生じた現象として考えられている、複数位格 -охъ 形態に触れて本稿を終えることにする。語尾 -охъ は、すでに古代スラブ語文献において、初め -Ū 語幹に、後に -Ŏ 語幹に現れている。Ф.П. Филин の引用例によると домохъ (Зографское, Маринское, Ассеманиево евангелия), сынохъ (Синайская псалтырь), дарохъ (Синайский Евхологий), жидохъ (Супрасльская рукопись) 等がある。それはこの場合 $\text{ъ} > \text{o}$ による音声現象ではなく、-Ŏ 語幹の影響による -Ū 語幹語尾の普遍化の結果であることは、 $\text{ъ} > \text{o}$ の現象のない Саввиная книга, Супрасльская рукопись において -ъмъ, -хъ の代わりに -омъ, -охъ が使用されていることによって明らかである、としている。

ところで東スラブ語方言においては -охъ 形態の使用は極めて稀であった。

С.П. Обнорский は北ロシア語方言の民話の中に次のような例を見出している、в зеленых садах (олон.), в устох (романо-борисоглеб.). 然るに軟変化複数位格語尾 -ѣх については事態は異なる。複数与格 -ѣм に続く複数位格語尾 -ѣх に関しては、南方大ロシア語方言において遍く見られる現象である、лошадѣм — лошадѣх, гостѣм — гостѣх. この現象はある場合、南方大ロシア語方言の外でも見られるが、С.П. Обнорский はこれを南方大ロシア語方言固有の現象として受取っている、лошадѣм (кинеш.), в лаптѣх, на санѣх, на днѣх (ростов.).

これ等の現象の解釈には、基本的に異なる二つの立場がある。その一つは Лось, Гебауэр, Важны, Карский, Обнорский 等によって支持されている説で、それによると短縮母音 ъ, ѣ が消滅した時期に -Ū 語幹複数位格語尾において -хъ > -ох があり、この -ох が語幹混同の過程において更に他の変化タイプの中で拡大したとするものである。然しながらこの説は、東スラブ語方言においては説明がつくにしても、強い位置における ъ の $\text{ъ} > \text{o}$ のない他の方言において適用は固難である。1868 年 И.А. Бодуэн де Куртенэ は、ポーランド語における事実に立脚して次のような説明を与えた。それは、複数位格語尾 -охъ は、-омъ, -омъ の影響下での -Ŏ 語幹格形態の整理過程の際、類推により生じたとするものである。恐らくこの形態的説明は、西スラブ語、南スラブ語方言に関しては、唯一可能なものであろう。しかも音声説を支持する А.А. Шахматов は、形態説も併せて認めて次のように述べている。古代語に

において w obrazoch, o synoch, o bratoch, o konioch 形態の見出せるポーランド語と比較すると, женамъ — женахъ が братомъ — братохъ を招いたとする, ロシア語の語尾 -охъ の異なる説明も又可能であると。

Ф.П. Филин によれば, 東スラブ語方言における -охъ 発生の形態的説明は, 語尾 -охъ が古代スラブ語におけるように 10 世紀から 11 世紀にかけてではなく, 短縮母音消滅後に東スラブ語方言の西南方に出現したと考えるならば可能である。新らしい閉音節における古い o は, 南方方言においては i 又は二重母音 -ix, -yox 等に変化したであろうが, しかしそのような事実は無かった。時としてウクライナ方言において見られる語尾 -ix は, -ѣхъ > -ix と解することができる。現在のところ, -Ō 語幹ならびに他の語幹における語尾 -ѣхъ が, 短縮母音 ъ, ѣ 消滅に到るまでに南方帰属の古文献にどれだけ広く使用されていたかの資料を欠いているが, もしも使用された事実が確認されるならば, 形態的説明は拒まるべきであろう。音声過程によって生じた -охъ 形態は, 隣接する西スラブ語方言により支持を得たという事だけが許さるべきである。そのような訳で, 主として東スラブ語方言の西方において定着を見たのであった, としている。

参 考 文 献

- Борковский В.И. и Кузнецов П.С. Историческая грамматика русского языка. М., Изд-во АН СССР, 1963.
- Булаховский Л. А. Исторический комментарий к русскому литературному языку. Киев, “Радянська школа” 1958.
- Соколова М. А. Очерки по исторической грамматике русского языка. Л., Изд-во ленингр. ун-та, 1962.
- Филин Ф.П. Происхождение русского, украинского и белорусского языков. Л., “Наука”, 1972.
- Черных П. Я. Историческая грамматика русского языка. М., Учпедгиз, 1954.
- Шахматов А. А. Историческая морфология русского языка. М., Учпедгиз, 1957.
- Якубинский Л. П. История древнерусского языка. М., Учпедгиз, 1953.